

自著を語る (34)



まちの健康回復に芝生の力を活かす

グラスパーキングの科学

伊藤 幹二・伊藤 操子 著

A5判、並製本、158頁 2,200円+税

企画：特定非営利活動法人グラスパーキング
「駐車場芝生化」技術協会

ISBN978-4-909933-18-8 C3061

著者のグラスパーキング（駐車場芝生化）との関りは、地元兵庫県が「ヒートアイランド対策計画」を策定し、これをもとに2005年に「駐車場の舗装改善・芝生化」の検証実験事業が開始され、出展企業のとりまとめ役として参画したことに端を発します。この事業で得られた貴重な科学・技術的情報は、著者ら有志で立ち上げたNPO法人グラスパーキング（駐車場芝生化）技術協会に現在も保存されています。

このような流れの中で、本書を著わすことにした直接の動機は、あるとき日本全土にわたりまちとよばれる地域（都市・市街地）の大半が、不透水物にすっぽり覆われている現実に気づき危機感をもったからです。いろいろな地域をグーグル・マップの航空写真でみると、愕然とします。確かに、それぞれに用途のある建築物や道路、鉄道等の必要不可欠な不透水施設・平面もありますが、とくにアスファルト・コンクリートで覆う必要のない平面も多いことが分かります。つまり、これは私たちが、どこにでも車を走行・駐車しやすいこと、敷地内平面の清掃や除草の手間が省けることなどの利便性を第一義的に選択した結果、起こっていることなのです。しかし、その便利さと引き換えに、地表面に貯熱・蓄熱性の不透水面を張り巡らせることに起因するまちの暑熱化と水循環異常は、熱中症、内水・外水氾濫、汚染・汚濁物質の拡散などという形で生活者を苦しめています。

本書における提案は、これらの駐車場の芝生化、つまり、不透水性のアスファルト・コンクリート面を可能な限り土壌と植物で構成される被覆、すなわち芝生に置き換えることです。持続性のある健全な芝生による環境保全機能、そして踏圧などの物理的ストレスに対する芝生の耐性は、芝の広範な用途と長年の歴史から見て疑いの余地のないものです。したがって、駐車場を芝生化するという発想自体は正しいはずですが、日本で駐車場の芝生化が試みられてからもう20年以上経過するなかで、残念ながら大半は

芝生の持続化に失敗し、この試みへの不信と疑問が残る結果となっています。持続性のある芝生化駐車場の整備は、本当はそれほど難しいことでも、コストの掛かることでもないにも拘らずです。これまでの失敗は、整備計画者（多くは設置や補助の責任者である公共団体）の‘造っておしまい’の考え方と設計・施工における生物科学・技術（とくに芝草科学）の専門家の不在によるものといえます。

本書は、大きくは前半の「基礎編」（第1章～第8章）と後半の「応用編」（第9章～第15章）に分かれています。「基礎編」では、今日の私たちの生活圏で毎年発生する深刻な豪雨災害や健康被害が、実はまちの表面の大半を舗装で覆ってしまったことにある事実を、背景や関連要因から解説しました。また、駐車場芝生化において主体をなす二者、すなわち舗装駐車場と芝生というものについて、その本質を紹介するとともに、それらの合体となる駐車場芝生化の本当の意義、および‘芝生’を知らないが故に生じた過去の累々たる失敗の社会的・科学技術的要因についても言及しました。同じことを繰り返さないためです。本書の半分を「応用編」に割いたのは、前半において駐車場芝生化の重要性に共感してくださり、実際に設置したいと考えられる方々に、雑音に惑わされることなく持続的で望ましい芝生化を行っていただきたいと思ったからです。計画から定着した芝生の長期的維持までに必要な具体的な事柄、さらに全過程の一貫性がいかに重要かを述べたつもりです。

まちの健康回復のために現状の過剰な舗装部分を芝生化することは、気象災害への対策と持続可能な開発目標11（SDGs, No.11）「住み続けられるまちづくりを」の実現に向けて喫緊の課題です。これには地権者・設置者、設計・施工・維持管理等に関わる企業や公共団体から、この環境影響を受ける市民・住民まで多くの直接的な関係者が存在し、実現に向けての協働が求められます。本書がこの課題への参考書としてお役にたてれば幸いです。